

次郎長翁を知る会 第 17 号

平成17年3月31日発行

静岡市清水相生町6-17 静岡市観光協会清水支部内 TEL (0543) 54 - 2420

竹内

(株)ニシガイ

TEL (0543) 52 - 2188

田口英爾

宏

発行所

発行人題 字

編集人

印刷所

₹424-0821

舞台を前に清水港 加藤剛さん

さん、愚庵役頼三四郎さん親子が清水港へやってきた。次郎長が生れ育った巴 時代に身をすり寄せるか、時代を蹴ちらすか。正月公演を前に、次郎長役加藤剛 清水港と駿河湾。二人の見たものは。

ことがあるという加藤剛さん。 あけた。主演は御前崎町出身で、中学生時代は、 十周年記念公演と銘打って、今年一月三日に幕を 二保造船に勤める兄を訪ねて清水には何度もきた 宮本研作「次郎長が行く」はこれまで芝居や映 東京三越劇場の正月公演は、 劇団俳優座創立六

けるかのように佇んでいた。百数十年も前、次郎 のほとりにまで入って行き、暫くの間、瞑想にふ あたり、コンクリートの護岸堤防の間から、流れ とくに巴川畔では、次郎長生家の対岸、壮士墓の も時間をかけたのは、巴川畔と日の出埠頭である。 になって大勢の子分たちと過ごしたのもこの巴川 が生れ育った頃と巴川の流れは変らない。 何箇所も廻っている中で、 加藤剛さんがもっと 明治

夕刻近い頃であった。ここには有名な咸臨丸事件

あちこちと廻った末、

興津清見寺を訪ねたのは

難者の碑がある。

永井尚志撰の碑文は漢字ばか

の後半生に焦点を当てている 画では演じられることがほとんどなかった次郎長 これから舞台稽古が始まろうという昨年暮の十

廻った。 興津清見寺、 壮士墓、次郎長の船宿末廣、 次郎長の墓参を兼ねて、清水に来訪された。 月末に、加藤剛さんと次男の頼三四郎さん親子が 案内役は編集子が担当、 坐漁荘とタクシー二台に分乗して 梅蔭寺、 日の出埠頭、さらに 次郎長生家、

梅蔭寺次郎長銅像前で、 加藤剛さん 左



間柄で、先生は東京から加藤親子と同行で来訪さ そうである。実は宮崎修多先生と編集子は旧知の 生。ゼミの教授宮崎修多先生が芸名の名づけ親だ 間立っている加藤剛さんの後姿に、私は打たれた。 懐かしげに加藤さんは語った。 から三保行のポンポン蒸汽に乗ったものです」と 畔だ。 愚庵役を演じる頼三四郎さんは、成城大学の学 H 何年かぶりでお目にかかることができた。 の出埠頭では、「中学生時分には、このあたり この流れを黙って見つめながら何分もの



左から頼さん加藤さん、田口、宮崎修多先生(梅蔭寺にて

りの難解文だが、宮崎先生はこれを即席で読み下りの難解文だが、宮崎先生の即席講議に聞き入っ目で追いながら、宮崎先生の即席講議に聞き入った。その時のメモをもとに、清水郷土史研究会のた。その時のメモをもとに、清水郷土史研究会のとして発表した。

数応募し、バス二台を連らねることとなった。数応募し、バス二台を連らねることとなった。この日の行程には、地元の朝日新聞清水通信局の岡さんが同行した。岡さんは十一月十九日の同か郎長翁を知る会が計画した観劇バスッアーを紹介し、「巴川の流れを黙って見つめ、感慨深げだった加藤さんの演技が見どころ」と報じてくれた。こうしたバックアップもあって、観劇バスツーは清水ばかりでなく、旧静岡市の人たちも多次郎奏し、バス二台を連らねることとなった。

二時開演の「次郎長が行く」を観劇。 時発。総勢八十三名は十一時過ぎ東京着、東京組時発。総勢八十三名は十一時過ぎ東京着、東京組成分には七時三十分発、清水産業情報プラザ前は八南口は七時三十分発、清水産業情報プラザ前は八南口は七年一月十二日、バス二台のうち静岡駅

じる伏谷判事も登場。千葉県市原から観劇に参加はじめ一同は楽しむ。舞台には河野正明さんの演およそ三時間に及ぶ熱演を、竹内宏会長夫妻を

げであった。 した、伏谷如水の御子孫高石鶴子さんは感慨ぶか

ンに応じて下さった。 正明さんらが、客席に顔を出し、記念撮影やサイ の場り、楽屋から加藤剛さん頼三四郎さん河野

で十九時頃、清水、静岡へそれぞれ帰着した。十六時三十分バス二台は三越前出発、東名経由

――「次郎長が行く」観劇ッアーに参加して―― 室は一藤剛、頼三四郎親子の共演に感動

の親子共演である。
の親子共演である。
の親子共演である。

望もうとした気魄が胸に伝わって来ました」と同 とっていました。「次郎長になり切って、舞台に されていました。しかも瞑想に時間をたっぷり 吸った空気を感じながら、舞台作りのイメージを 次郎長ゆかりの梅蔭寺、次郎長生家、 行した田口先生の感想でした。 次郎長が生まれて、生活をした場所、 末廣等を見学されました。江戸から明治にかけて 々を祝福してくれているようでした。 出発の一月十二日は、快晴。真白な富士山 加藤剛さん親子は、舞台稽古を前に、清水を訪 日本橋 次郎長翁を知る会の、 |三越劇場」に到着しますと、竹内宏会 田口英爾先生の案内で 見た風景、 壮士の墓、

に参加して―― 室 伏 尚 美



観劇ツアー参加者

◎青 木 宏 樹 清水区 青 木 Œ. 孝 清水区 青 木 美也子 清水区 堀 淑 子 清水区 ◎赤 野 香 清水区 ◎天 藤 とし江 安 清水区 井 Ш 明 美 旧静岡 史 郎 井 旧静岡 _ 塚 恒 森町 ◎大 ◎大 村 新 治 清水区 村 大 ふじ乃 旧静岡 ◎大 村 良 雄 旧静岡 〇岡 明 人 清水区 小 沢 静 代 旧静岡 村 中 武 雄 旧静岡 ◎片 Ш 正 清水区 子 ②金 昌 義 清水区 ②金 原 寛 清水区 久保田 和 子 旧静岡 久保田 裕 夫 清水区 昭 夫 齊 藤 旧静岡 ◎佐 野 大三郎 富士 野 子 佐 文 清水区 津 繁 子 旧静岡 島 浦 邦 子 旧静岡 杉 幹 清水区 ◎杉 山 治 ◎鈴 木 幸 江 清水区 ◎鈴 木 正 司 清水区 ◎高 木 久 枝 旧静岡 ◎高 田 恵美子 清水区 髙 橋 圭 子 旧静岡 橋 保 ◎高 清水区 ◎高 橋 俊 夫 富士 英 爾 OH 口 清水区 堤 枝 清水区 ◎堤 博 利 清水区 旧静岡 永 井 益三郎 永 井 リエ子 旧静岡 島 今 代 旧静岡 長

永 田 きよ子

清水区

岡

◎は次郎長翁を知る会会員

西 \mathbf{H} せ つ 旧静岡 谷 征 司 清水区 ◎糠 橋 本 久仁子 旧静岡 美知子 長谷川 旧静岡 満里子 旧静岡 原 \mathbf{H} ◎布 施 昌 作 清水区 ◎牧 野 巽 清水区 松 子 林 幸 清水区 路 松 原 清水区 松 本 検 清水区 ひさ子 浦 清水区 三 ◎村 上 茂 信 清水区 伏 美 ◎室 尚 清水区 ◎望 月 憲 清水区 下 森 せ つ 旧静岡 ふさ子 山 崎 旧静岡 山 下 栄 子 旧静岡 Щ 田 公 代 清水区 倢 司 OЩ 田 清水区 ØЩ 梨 弘 清水区 子 ◎横 山 知 旧静岡 ◎吉 \blacksquare 静 子 清水区 辺 子 悦 清水区 渡 辺 治 健 清水区 <東京組参加者> ◎高 石 鶴 子 市原 ØШ 下 茂 樹 さいたま ◎林 純 川口 博 沢 大和 富 梅 谷 英 子 鎌倉 幸 子 大 塚 東京 西 條 晴 子 東京 中 村 美津子 調布 森 下 和 子 横浜 ◎長谷川 満 秦野 戸 塚 進 也 掛川 ◎長島範明夫妻 東京 ◎竹内宏会長夫妻 川崎

なり、 山岡鉄舟の紹介で、次郎長のもとに来て、養子に 何故ならば、 頼三四郎さん演ずる、

郎

長御夫妻もすでに、

お見えになっていました。

物語りは、

清水仲町、

妙慶寺そばの、

山本長五

の熱演、 ニつに一つ」 私は興奮と感動を味わいました。 加藤剛さんの重厚さと渋み、 俳優座の皆様 頼三四郎さ

郎長に徳川に賭けてくれと申し出るのだった。

然、若き日の幕臣、

山岡鉄太郎が訪ねて来る。

次 L

かし次郎長は「お上のご用は遠慮申し上げるのが

んでしまう。 渡世の道」と断る。

鉄舟と次郎長の出会いは、まさしく、

山岡はそんな次郎長にほれこ

名伯楽に出会った瞬間であったろうと思われる。

んのフレッシュさと将来性を感じさせる演技に魅

の儀が、ささやかに催されていました。そこに突

(次郎長)宅で、二代目のお蝶を迎えての祝言

れた、大恩人である。 「時代に身をすり寄せるか、時代を蹴散らすか、 舞台終幕のクライマックスで、次郎長は囁く。 あの有名な「東海遊侠伝」を世に出してく

天田五郎は、 了されました。 ファンと言う加藤剛さん、 舞台終了後、

おり、 ニュースを翌日の新聞で知りました。 記念写真をとりました。 おりしも、三越では、平山郁夫展が開催されて

ましたが、どれも素晴しく、 きました。 小泉純一郎首相が観賞に訪れたと言う 大満足で、帰路につ 私も拝見し (運営委員

切れ味鋭い筆法の竹内宏会長 頼三四郎さんと全員で

横浜

美智子

特別寄稿

徳川慶喜と清水港

河合重子

様なものである。「徳川慶喜公伝」四に「逸事」という章があって、「徳川慶喜公伝」四に「逸事」という章があって、「徳川慶喜公伝」四に「逸事」という章があって、「徳川慶喜公伝」四に「逸事」という章があって、

日々網の稽古をなされたるなりけり。「静岡にて或日川狩を催されける時、興に乗じた無常がせ給ひたるが、今度はいとも易々と見事に網を投げ給へり。そは公が前日の失敗と見事に網を投げ給へり。そは公が前日の失敗と見事に網を投げ給へり。そは公が前日の失敗と見事に網を投げ給へり。そは公が前日の失敗と見事に網を投げ給へり。そは公が前日の失敗と見事に網を投げ給へり。そは公が前日の失敗に乗かで、公職を試み給へるに、馴れぬ業とて網の稽古をなされたるなりけり。

網」の記事は見当らない。一方「静岡にて…川狩」 出家記」で嘉永・安政年間をしらべてみたが「投場所も品川沖として潤色の上、小説「最後の将軍」に使った。念のため「家扶日記」の前身「一橋徳に使った。念のため「家扶日記」の前身「一橋徳に使った。念のため「家扶日記」の前身「一橋徳に使った。念のため「家扶日記」の前身「一橋徳とするの御気質なりき。」

とあるのを、清水港でのこととしてみれば、田口

年の一年間だけで、慶喜は四十七回も清水港を訪 英爾氏の「家扶日記」にもとづく調査で、明治五 すと、もう一ぺんお出かけを願いに行きそうなこ の席上でさえ、「あの時世(明治初年)でありま したことと思われる。明治四十二年十月の昔夢会 引き継いだ次郎長は諸方面への眼くばりに心を労 明治二年の暮に新門辰五郎から慶喜の身辺警護を ろまでは気のゆるせない空気があったと思われる。 は明治と変っても、少なくとも西南戦争の終るこ 通ったのも自然であったろう。しかし世の中の方 おだやかで人の心を和ませるから、慶喜が足繁く すべてが投網でなかったにしても清水港の風光は せるために、頻りに清水港を訪れたと思われる。 はじめは気晴らしのために、後には趣味を満足さ 恐らく慶喜は明治二年九月に謹慎を宥されると、 れている。「家扶日記」は明治五年以前を欠くので

の世界につれて行ってくれる。の世界につれて行ってくれる。「末廣」にいつもきているないだろうか?私は慶喜、にはずっと静岡にいて、幼かった久のあたまをなでたという次郎長。復元された末廣に展示されているという次郎長。復元された末廣に展示されているという次郎長。復元された末廣に展示されているという次郎長。復元された末廣にはずっと静岡にいてもらいたかったのである。「末廣」にいつもきていもらいたかったのである。「末廣」にいつもきている。

たいのである。には一すじの心のつながりがあったと、私は思いには一すじの心のつながりがあったと、私は思い八歳も上だが、全く異なる人生を生きた二人の間慶喜は天保八年うまれだから、次郎長の方が十

編 集 室 から

●徳川慶喜研究の第一人者、河合重子さんに特別 ・徳川慶喜研究の第一人者、河合さんは二月二十日 寄稿していただきました。河合さんは二月二十日 ・直木賞作家山本一力さんが、この六月十二日に 開催の当会総会に参加、ご講演していただきます。 場所は興津公民館を予定。詳細は続報で。山本一力さんは目下「オール読物」で次郎長を連載中です。ほかにも『梅咲きぬ』『だいこん』など、ヒット作を連発中。著者ご自身の人柄も、義理人情にきわめてあついとM紙の書評にありました。 ・「次郎長翁を知る会」ホームページのアドレスが次のように変更になりました。

http://jirocho.com

のである。しかし、東京移住後の彼は天皇と会見治以後、慶喜にとって政治に関する話はタブーななくなったね。」と、さりげなくかわしている。明知った人がなくなったね。四、五人寄ってその時知った人がなくなったようですが。」と、阪谷芳郎がとがたくさんあったようですが。」と、阪谷芳郎が

公爵にもなっている。これは政治的行動とい